

青少年の適応状態に関する社会生活イメージ尺度（中学生版）の 作成

青戸 泰子*

Development of a Social Self-image Scale in Social Adaptation of Adolescents —Junior High School Student Version—

Yasuko AOTO*

The purpose of the present study was to develop a social self-image scale (junior high school student version) and examine its reliability and validity. As a result, three pronounced factors have been extracted: 'a social life sense of fulfillment', 'a feeling of self-affirmation' and 'initiatives to address issues'. To examine reliability, both Cronbach's coefficient alpha and test-retest method were applied. This scale was also significantly correlated with social self-efficacy. Thus, the new scale was shown to have good reliability and validity.

key words: a sense of social adaptation, a social self-image, adolescents, support

問題と目的

青少年に関する社会生活の適応に関する研究は、これまでは、学校や家庭そして自我同一性の問題などから論じられてきた。しかしその適応状態をどの様に捉えるかという点について様々な見解がある。

青少年の適応状態を単に形や行動面だけでなく、子どもの内面の状態すなわち、「自分をどう感じているか」という自己概念に着目することは意義があるだろう。小林・霜村(2001)は、自己概念の変動が、子どもの示す適応状態と密接に関連していると指摘している。自己概念は「人が自分自身について抱く気持ちのことであり、自己像のことである」(Rogers, 1951)というように広い概念として捉えられている。

一方で、青少年の適応状態の具体的事項を検討するためには、自己概念より狭義の「社会生活に適応している自己像」に焦点をあてることも必要であろう。

また、青少年の適応状態を把握するためには、学校や家庭生活における適応状態のみに限定せず、青少年の社会生活全般に関して自身が感じている適応感に注目する視点も重要である。

青少年の育成に関しては、青少年自身が現時点で感じている社会生活に関する適応感を把握すること、およびその適応感と「将来の社会的自立」すなわちキャリア形成に関連があるのか、将来のキャリア形成に影響を及ぼすのかを知ることは、社会的不適応に陥っている、もしくは、陥りそうな青少年への援助の手がかりになると考えられる。

* 関東学院大学

Kanto Gakuin, 1-50-1 Mutsuurahigashi, Kanazawa-ku, Yokohama, 236-8503, Japan.

このように、「将来、自立して充実した人生を送ることができる」ことを一つの援助目標にすることは、青少年の不登校問題においても「その最終目標が単に学校復帰といった行動面や形に焦点をあてるのではなく、子どもが将来的に自立し、豊かな人生を送ることができるよう、その社会的自立に向けて援助する」という将来の社会自立に向けた支援（文科省、2003）の視点とも一致する。

田中・原野(1992)は、不登校の子どもは、健常児群と比べ自己評価が低いことを指摘している。これは、「学校に行けない」といったひとつの不適応状態から、社会生活全般への不適応感につながり、しだいに自己評価の低い、ネガティブな自己イメージに陥ると考えられる。

一方で、学校に登校できている青少年はどうであろうか。登校ができているという行動面では問題がなくても、「社会生活がうまくやっけていけそうにない」といったネガティブなイメージを感じている青少年も多く存在するのではないだろうか。そういった状態が長く続くことで、不登校や非行傾向など二次的な不適応状態を招きかねない。

つまり、子どもの内面の状態を把握することは、社会的不適応の予防や、不適応問題への援助に役立てられる可能性があり、さらには、青少年のキャリア支援への示唆にもつながるだろう。

南ら(2011)は、小学生の予期不安と中学入学後の適応感との関連を示している。また、鈴木ら(2016)は、大学生への移行期における適応感と自己概念の関連について示唆している。このことから、現時点での適応感は将来への適応状態に関連や影響を及ぼすことが推察される。

つまり、青少年が現時点で感じる適応感は、将来の夢や希望を描く上で、大切な要素になっているのではないか。それは、現時点において「人や社会とうまくやれている」という感覚や自己概念があれば、将来の人間関係や社会生活においても「うまくやっけていけそうだ」といったイメージが描きやすくなるだろう。逆に、現時点で「うまくやっけていけそうにない」といったイメージを持っている場合は、将来においても、人間関係を含めポジティブなイメージが描きにくくなり、夢や希望を失ってしまうとも考えられる。

本研究の目指すところは、青少年の適応感に関し

て実態に即した測定具の開発を行い、青少年が社会生活に適応していると感じる「社会生活に関する自己イメージ」と「将来、自立して充実した人生を送ることができるようになる」というキャリア展望との関連を検討することにより、青少年の社会生活における適応感を高めるための支援のあり方、さらにはキャリア支援を効果的に行うための示唆を得ようとするものである。

本研究では、青少年の自己概念の中でも「社会生活に関する自己のイメージ」に焦点をあて、青少年の適応感の具体的な事柄を探る。「社会生活に関する自己のイメージ」とは、子どもが「社会生活がうまくやれている」・「社会生活がやっけていけそうだ」といった社会生活に関する自分自身の認知として捉える。そして、「社会生活イメージ」を「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」と定義する。

また、本研究における青少年については中学生・高校生を対象として検討することとする。

そこで本研究では、まず中学生を対象として、「社会生活ができている、できそうだ」および「社会生活に充実感を感じている、感じていない」といった社会生活に関するイメージすなわち「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」を測定する「社会生活イメージ尺度」を作成することを目的とする。

予備調査

目的

中学生が社会生活を楽しく充実感を持って送るためには、「どの様なことが必要と感じているか」・「どの様なことができればよいと考えているか」を調査し、中学生の社会生活イメージを測る項目を作成・選定する。

方法

調査対象 関東圏の公立中学校2校6クラス（各学年1クラスずつ）の男女187名、および同県の適応指導教室（不登校支援を行う教室）に通う生徒の男女20名を対象とした。

調査時期 20XX年6～7月に実施した。

手続き 中学校長に、質問紙を各クラスで実施するよう依頼して、調査票を郵送（または持参）し、後日回収した。適応指導教室については、所属長に依頼して、担当教諭に教室において通室生徒複数で何度か話し合ってもらった後、質問にそって、自由記述で

回答を依頼した。

調査内容 公立中学校生徒に教室で質問紙を配布し、「社会生活を送るために必要と思われることは、何があるか?」について、自由記述で回答を求めた。また、適応指導教室生徒には、「社会で自立するために必要と思われることは何があるだろうか?」という話し合いを何度か繰り返した後、それぞれの生徒に、社会生活を送るためには、「こうなればいいと思うこと」・「必要と思われること」といったイメージについて自由記述を求めた。それぞれの記述内容の検討に現職教員2名を加えて、KJ法を用いて分類したところ、「学習」・「生活・習慣」・「人との関わり」・「社会との関わり」・「自分に関すること」といった5つのカテゴリーに分けられた。

5つのカテゴリーごとに5つの質問項目を設定した計25項目について、回答方法は4件法で、「いいえ」を1点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「どちらかといえばはい」を3点、「はい」を4点とし、得点が高い程、社会生活イメージがポジティブなものである、低い程ネガティブなものであることを意味する形で質問紙が作成された。

内容的妥当性 これらのカテゴリーや生徒が記述した事柄を参考にし、また、中学生を対象とした社会生活イメージ尺度に必要と思われる項目を、教育相談関係者数名と教職員そして心理学専攻の大学院学生数名および専門家により作成された項目の内容が、具体的に日常生活で行われている事柄であるか、抽象的な表現になり意味が分かりづらくないか、スキルだけでなく「楽しい、嬉しい」といった情動的な内容が取り入れられているか、ということについて検討が行われた。その結果、25項目が予備調査の項目として採択された。

予備調査の実施と結果

25項目からなる「中学生の意識調査」と題した調査票を、20XX年7月に、関東圏の公立中学校2校と私立中学校1校の男女695名を被験者として実施した。回答方法は4件法(1:いいえ~4:はい)で行い、評定値をその項目の得点とした。有効回答者数は664名であった。この回答をもとに、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、複数の因子に同時に高い負荷量を持った項目を除外し、解釈可能なものみにした所、3因子18項目を抽出した。

その内容から各因子は、第1因子「自己コントロー

ル感」、第2因子「社会生活充実感」、第3因子「自己肯定感」と命名した(Table 1)。

さらに、内容的妥当性の検討を基にして、これら18項目とは別に解釈に必要と思われる2項目(「将来やってみたいことや憧れの職業はありますか」、「計画を立てて、勉強に取り組むことができますか」)を追加した。以上のような手続きによって、暫定版社会生活イメージ尺度(中学生版)が作成された。

研究 1

目的

予備調査で選定された暫定版20項目をもとに、中学生の社会生活イメージを測る尺度を作成する。

方法

調査対象 関東圏の公立中学校7校と私立中学校2校における男女1,916名の中学生である。

調査時期 20XX+1年1月から2月に実施した。

手続き 中学校長に、質問紙を各クラスに実施するよう依頼し、調査票を郵送(または持参)し、後日回収した。

調査内容 20項目からなる「中学生の意識調査」と題された調査票を対象者全員に実施した。

暫定版社会生活イメージ尺度(中学生版):3下位尺度20項目から、中学生の社会生活イメージを暫定的に測る尺度である。社会生活イメージは「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」と定義され、「自己コントロール感」「社会生活充実感」「自己肯定感」という3つの因子から成り立っている。回答方法は4件法で、「いいえ」を1点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「どちらかといえばはい」を3点、「はい」を4点とし、得点が高い程、社会生活イメージがポジティブなものである、低い程ネガティブなものであることを意味する。

結果と考察

因子構造の抽出 有効回答者1675名に対して、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を繰り返し行った結果、3因子解を得た。因子分析については、特定の因子に対して.35以上の負荷量を持ち、同時に他の因子に対して.35以上の負荷量を持たないことを基準に項目を選定した。さらに精選できると判断された項目を統合し、.35以上の負荷量を持つものだけを残して再度因子分析を行い、固有値が1.0以上の解

Table 1 暫定版社会生活イメージ尺度の因子分析結果

項目	M	SD	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子「自己コントロール感」($\alpha = .843$)						
9 TVゲームや遊びなどの時間は決められますか。	2.08	1.15	.812	-.187	-.103	.483
6 朝、気持ちよく起きることができますか。	2.06	1.12	.750	-.258	.001	.461
22 気持ちはおだやかですか。	1.85	.95	.709	-.234	.148	.536
1 努力によって、勉強はできるようになりますか。	1.66	.85	.618	.214	-.136	.423
8 気持ちよく1日を過ごすことができますか。	1.97	.89	.556	-.074	.191	.438
4 わからないことがある時、調べたり、人に聞いたりして知りたいですか。	1.96	.92	.530	.255	-.128	.359
16 礼儀（ルール）が守れますか。	1.85	.87	.472	.266	-.043	.367
19 人に役立つことが嬉しいと思いますか。	1.71	.87	.412	.305	.114	.481
11 自分の意見や気持ちを人に伝えることができますか。	2.19	.96	.357	.213	.157	.370
第2因子「社会生活充実感」($\alpha = .724$)						
2 1日のうちで、30分位なら勉強に取り組みますか。	2.32	1.09	-.122	.724	-.102	.414
17 いろいろな体験は自分にとって必要なことだと思いますか。	2.20	1.09	-.240	.669	.022	.373
10 趣味や楽しみなことがありますか。	1.81	.90	-.069	.494	.116	.280
12 友達に対して思いやりの気持ちがありますか。	1.95	.88	.204	.430	.203	.487
3 学習することが楽しいと思うことがありますか。	2.25	.95	.241	.410	-.016	.301
13 家族と話をしていますか。	1.72	.91	.291	.371	.017	.330
第3因子「自己肯定感」($\alpha = .648$)						
24 自分のいいところを知っていますか。	2.46	.99	.028	-.057	.721	.506
25 自分は良い方になってきたと思いますか。	2.19	.96	.222	.028	.514	.481
20 将来の自分に対して、良いイメージをもっていますか。	2.53	.96	-.199	.288	.457	.297
因子間相関			第1因子	.44	.65	
			第2因子		.50	
			第3因子			

積可能な3領域20項目を抽出した。

因子の命名 本研究では、Table 2に示すように因子の命名を行った。第1因子は、人に役立つことが嬉しい、趣味や楽しみなことがある、体験は自分にとって必要なことである、といった人や社会生活に関係する項目から構成されており、「社会生活充実感」($\alpha = .81$)と命名された。第2因子は、気持ちはおだやかである、自分のいいところを知っている、といった自分に関する項目からなり、「自己肯定感」($\alpha = .73$)と命名された。第3因子は、計画を立てて勉強に取り組める、学習することが楽しいと思う、といった学習や課題への遂行に関する項目から構成されており、「主体的な課題への取組み」($\alpha = .71$)と命名された。

社会生活イメージ尺度の作成 本研究では、中学生の社会生活に関する3因子20項目から、「自分が、社会生活やうまくできている、できそうだ」というすなわち「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」を測る尺度を作成した。作成された尺度には「社会生活イメージ尺度（中学生版）」とネーミングした。

この尺度の各下位尺度に着目すると、「社会生活充実感」は、大野(1984)の「生活充実感：充実感尺度短縮版」における「充実感気分」「連帯」「信頼」に相当している。また、「自己肯定感」は、松井・佐藤(2000)により選定された自己肯定感尺度の項目と関係があり、それらを表していると考えられる。また、「主体的な課題への取組み」は、島本・石井(2006)の日常生活スキル尺度の「計画性」に相当している。さらに、中学生の社会生活に関する項目を基に、第1選択基準を、中学生自身が「社会生活がうまくできている、やれそうだ」と感じられる内容であるか、第2選択基準を、中学生の行動・思考レベルで具体的に記述されているか、として教職員2名、スクールカウンセラー2名、心理学専攻の大学院学生数名および専門家と共に検討した。このように本尺度は、因子的妥当性が認められ、中学生の社会生活を過ごすうえで必要な事柄を捉えているといえる。

Table 2 社会生活イメージ尺度の因子分析結果

項目	M	SD	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子「社会生活充実感」($\alpha = .812$)						
19 人に役立つことが嬉しいと思いますか。	1.68	.852	.629	.081	.038	.491
18 将来やってみたいことやあこがれの職業がありますか。	1.84	1.006	.627	-.006	-.103	.323
10 趣味や楽しみなことがありますか。	1.59	.862	.617	-.124	.016	.321
20 将来の自分に対して、良いイメージをもっていますか。	2.30	.973	.605	.054	-.039	.376
17 いろいろな体験は自分にとって必要なことだと思いますか。	1.80	.952	.594	-.301	.267	.432
12 友達に対して思いやりの気持ちがありますか。	1.92	.853	.495	.163	.048	.399
13 家族と話をしていますか。	1.75	.894	.387	.131	.137	.321
16 礼儀(ルール)が守れますか。	1.86	.879	.371	.146	.130	.311
11 自分の意見や気持ちを人に伝えることができますか。	2.20	.941	.368	.292	.009	.346
第2因子「自己肯定感」($\alpha = .730$)						
6 朝、気持ちよく起きることができますか。	2.45	1.125	-.172	.625	0.54	.323
22 気持ちはおだやかですか。	2.11	.949	.211	.595	-.137	.448
8 気持ちよく1日を過ごすことができますか。	2.09	.939	.165	.584	-.075	.427
9 TVゲームや遊びなどの時間は決められますか。	2.47	1.166	-.227	.535	.181	.274
24 自分のいいところを知っていますか。	2.51	1.000	.172	.463	-.030	.315
25 自分は良い方になってきたと思いますか。	2.19	.958	.187	.424	.027	.320
第3因子「主体的な課題への取組み」($\alpha = .712$)						
2 1日のうちで、30分位なら勉強に取り組みますか。	2.02	1.054	.132	-.213	.688	.480
4 わからないことがある時、調べたり、人に聞いたりして知りたいですか。	1.94	.935	.035	.168	.508	.392
3 学習することが楽しいと思うことがありますか。	2.25	1.024	.145	.090	.475	.389
1 努力によって、勉強はできるようになりますか。	1.69	.846	-.026	.286	.448	.376
5 計画を立てて、勉強に取り組むことはできますか。	2.68	.972	-.183	.314	.413	.265
因子間相関			第1因子 第2因子 第3因子	.56 .60 .45		

研究 2

目的

作成された社会生活イメージ尺度(中学生版)の妥当性を検討する。

方法

調査対象 関東圏の公立中学校1校、私立中学校1校における合計319名の中学生を対象とした。

調査時期 20XX+1年3月に実施した。

手続き 教育相談担当教諭の協力のもと、担任教諭に教示文を渡し、質問紙をクラスごとに実施するよう依頼し、後日回収した。

調査内容 次の尺度の質問項目を対象者全員に実施した。

(A) 社会生活イメージ尺度 3下位尺度20項目から、社会生活イメージを測る尺度である。社会生活イメージは「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」と定義され、「社会生活充実感」「自己肯定感」「主体的

な課題への取組み」という3つの因子から成り立っている。回答方法は4件法で、「いいえ」を1点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「どちらかといえばはい」を3点、「はい」を4点とし、得点が高い程、社会生活イメージがポジティブなものである、低い程ネガティブなものであることを意味する。

(B) 特性自己効力感尺度 成田・下中・中里・河合・佐藤・長田(1995)が作成した尺度で、23項目からなる。本研究では、「社会生活がやっていけそうだ」という社会生活に関する自己効力感が本尺度と正の相関関係にあると予測される。

結果と考察

社会生活イメージ尺度(中学生版)と特性自己効力感尺度全体の相関関係をTable 3に示す。社会生活イメージと特性自己効力感との間には、やや弱い正の相関関係($r = .31$)が認められた。この結果は、社会生活イメージが、「社会生活がやっていけそうだ」という自己効力感を表わすだけでなく、「社会生

Table 3 社会生活イメージ・特性自己効力感の相関

	a1	a2	a3	A	B
a1 社会生活充実感					
a2 自己肯定感	.52**				
a3 主体的な課題への取り組み	.57**	.46**			
A 社会生活イメージ尺度 全体	.82**	.79**	.82**		
B 特性自己効力感尺度 全体	.34**	.29**	.18*	.31**	

** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

Table 4 社会生活イメージ・生活充実感・自尊感情の相関

	a1	a2	a3	A	C	D
a1 社会生活充実感						
a2 自己肯定感	.56**					
a3 主体的な課題への取り組み	.43**	.47**				
A 社会生活イメージ尺度 全体	.86**	.84**	.74**			
C 生活充実感尺度 全体	.66**	.43**	.62**	.63**		
D 自尊心感情尺度 全体	.54**	.46**	.38**	.47**	.70**	

** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

活を楽しめている、嬉しく感じている」といった情動をイメージするものや、「やりがいや、生きがいににつながる」という社会生活充実感を含んでいるためと考えられる。構成概念妥当性は、社会生活に関する自己効力感については、概ね支持されたと言えるが、特に「社会生活充実感」については、既成の社会生活充実感尺度との関連等からも妥当性を検討して必要があるだろう。

研究 3

目的

作成された社会生活イメージ尺度(中学生版)の妥当性の再調査および再テスト信頼性を検討する。

方法

調査対象 関東圏の私立中学校1校における113名の中学生を対象とした。

調査時期 20XX+1年7月から10月にかけて実施し、再テストは、3ヶ月の間隔をおいて実施した。

手続き 教育相談担当教諭の協力のもと、担任教諭に指示文を渡し、質問紙をクラスごとに実施するよう依頼し、後日回収した。

調査内容 次の尺度の質問項目を対象者全員に実施した。

(A) 社会生活イメージ尺度(中学生版)：3下位尺度20項目から、社会生活イメージを測る尺度であ

る。社会生活イメージは「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」と定義され、「社会生活充実感」「自己肯定感」「主体的な課題への取り組み」という3つの因子から成り立っている。回答方法は4件法で、「いいえ」を1点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「どちらかといえばはい」を3点、「はい」を4点とし、得点が高い程、社会生活イメージがポジティブなものである、低い程ネガティブなものであることを意味する。

(B) 充実感尺度短縮版：この尺度は、大野(1984)が作成した尺度で、4下位尺度20項目からなる。本研究では、社会生活に関する充実感と本尺度が正の相関関係にあると予測される。

(C) 自尊感情尺度(山本ら, 1982)を用いた。本尺度は10項目からなる。本研究では、自尊感情と本尺度が正の相関関係にあると予測される。

結果と考察

社会生活イメージ尺度(中学生版)と生活充実感尺度および自尊感情尺度全体の相関関係をTable 4に示す。社会生活イメージと生活充実感との間には、中程度の正の相関関係($r = .63$)が認められた。この結果は、社会生活イメージが、「社会生活を楽しめている、嬉しく感じている」といった情動をイメージするものや、「やりがいや、生きがいににつながる」という

社会生活充実感を表わしていることが示された。また、社会生活イメージと自尊感情との間には、やや弱い中程度の正の相関関係 ($r=.47$) が認められた。本尺度の因子である「自己肯定感」と自尊感情尺度には正の相関が予測された。従ってこの尺度の構成概念妥当性は、概ね支持されたとと言える。

今後、「主体的な課題への取組み」など、尺度全体と各下位尺度の構成概念的妥当性についても検討していく必要があるだろう。

また、3ヶ月後の再検査の結果、社会生活充実感得点 ($r=.60$)、自己肯定感得点 ($r=.57$)、主体的な課題への取組み得点 ($r=.62$)、それぞれ高い相関が認められた。さらに、再検査の得点の合計と社会生活イメージ尺度の合計得点との間にも高い相関 ($r=.68$) が認められ、本尺度の信頼性が確認された。

総合的考察

本研究では、青少年の「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」を測定するものとして「社会生活イメージ尺度」(中学生版)を作成した。そして、3つの因子が抽出された。第1因子は、人に役立つことが嬉しい、趣味や楽しみなことがある、体験は自分にとって必要なことである、といった人や社会生活に関係する項目から構成されている「社会生活充実感」、第2因子は、気持ちは穏やかである、自分のいいところを知っている、といった自分に関する項目からなる「自己肯定感」、第3因子は、計画を立てて勉強に取り組める、学習することが楽しいと思う、といった学習や課題への遂行に関する項目から構成されている「主体的な課題への取組み」とした。

本研究の結果から、中学生が「社会生活がうまくやれそうだ」「うまくいっている」といった社会生活に関する肯定的な感覚を獲得するためには、「～ができる、～ができない」といったことだけでなく、「嬉しい、楽しい」といった情動的な感覚が必要であり、さらには、家族や友達など他者との肯定的な関わりが基礎となっていること、そして、趣味や楽しみなことなどの体験を通して未来に拓かれた自己のイメージを持てるようになることなどが推察された。

そしてそれがまさしく社会生活充実感となることが考察された。本尺度が、「やりがいや、生きがいにつながる」という社会生活充実感尺度(大野, 1984) と高い正の相関にあることもその裏づけとい

えるだろう。

また、「学習することができる」などといった課題の遂行に関することでも、「～しなければならぬ」とか「～をやらされている」という感覚ではなくて、自ら主体的に取り組むことで、「～することが楽しい」とか「～がここまでできる」といった達成感が、社会生活への肯定的なイメージにつながるのではないだろうか。そして、「他者との肯定的な関わり」を基礎として、趣味や楽しみな体験への挑戦心が芽生え、主体的な課題への取組みや達成感を通して、「自分のいいところを知っている」といった自己肯定感につながっていくとも考えられる。

つまり、「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」は、「肯定的な人間関係」を基に、主体性から生まれる自律的な取組みが重要であり、それらが社会生活充実感や自己の肯定的な感覚となって、「社会生活がうまくできている」「やれそうだ」という社会生活に関する適応感の獲得につながっていくのではないかと考察された。

一方で、「主体的な課題への取組み」についての事柄として「勉強」や「学習」といったキーワードが抽出されたが、これは関東圏の中学生を対象にしていることから、高校や大学受験を視野に入れた「社会適応」をイメージする生徒が多いのではないかと考えられる。

本研究では、青少年が社会生活に適応していると感じる「社会生活に関する自己イメージ」と「将来、自立して充実した人生を送ることができるようになる」というキャリア展望との関連を検討することにより、青少年の適応感を高めるための支援のあり方やキャリア支援を効果的に行うための示唆を得ようとするものであることから、今後は中学生から高校生まで対象と地域を広げて検討することも必要である。特に「主体的な課題への取組み」としての事柄を、青少年がどの様にイメージしているのかについてさらに検討することは、青少年のキャリア支援の手がかりのひとつとなるかもしれない。

今後の課題

本研究では、「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」を把握するためのひとつの尺度として「社会生活自己イメージ尺度」(中学生版) が作成された。

今後は、「社会生活自己イメージ尺度」(高校生

版)の作成を行い、青少年における社会生活に関する肯定的な感覚についてさらに考察を深める必要がある。

また、本研究での対象者が関東圏の中学生であることから、関東圏以外の中高生を対象とした「社会生活イメージ」の研究を進める必要もあるだろう。

以上のことを踏まえ、青少年の社会生活の適応感が「将来の社会的自立」すなわちキャリア形成に関連があるのか、本人が感じている現時点での適応感が将来のキャリア形成に影響を及ぼすのかについて検討することは、社会的不適応に陥っている、もしくは、陥りそうな青少年への援助の手がかりになると考えられる。

そして、「社会生活に関して自己の肯定的な感覚」とキャリア成熟との関連および影響性について検討していくことが今後の課題である。

引用文献

- 小林正幸・霜村 麦 2001 不登校経験者の自己概念の変容に関する研究—不登校経験者の回復期に必要とされるソーシャル・サポートを中心に— 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, **52**, 301-316.
- 松井賢二・佐藤優子 2000 中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟, 自己肯定感との関係 新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編), **3**(1), 157-166.
- 南 雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村 淳 2011 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究 教育心理学研究, **59**, 144-153.
- 文部科学省 2003 今後の不登校への対応の在り方について(報告) 不登校問題に関する調査研究協力者会議 .
- 成田健一・下中順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性自己効力感の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, **43**, 306-314.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, **32**, 12-21.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: Its current Practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin, (友田不二夫・伊藤 博・堀 淑昭・佐治守夫・畠瀬 稔・村山正治訳編『ロージャズ全集』1966-1968: 3, 5, 7, 8, 16巻に収録).
- 鈴木公基・鈴木みゆき 2016 大学への移行期における適応感・自己概念の検討 関東学院大学人間環境研究所所報, **150**, 43-58.
- 島本好平・石井源信 2006 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, **54**, 211-221.
- 田中勝弘・原野広太郎 1992 健常児と登校拒否児および健常児群における自己概念に関する研究 教育相談研究, **30**, 8-15.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 pp. 558-583.

(受稿: 2020.6.11; 受理: 2020.9.25)